

「神の国は来る」(ルカ一七章二〇～三七節)

1 イエスと神の国

先週は、教会の暦で、聖霊降臨祭(ペンテコステ)でした。今週は三位一体主日になります。父なる神、御子イエス・キリスト、それに聖霊が加わって、今日は三位一体の神をおぼえるとき、祝うときです。

説教はしばらく(七月後半まで)ルカのままです。今日は一七章ですが、一九章二七節までを予定しています。その後につづくイエスの受難史はすでに昨年読み終えています。

さて今日の箇所、イエスの少し長い教えです。《神の国》とか、あるいは《人の子もその日現れる》とか、一般に、世の終わりに関わるものです。ただルカは、この後二二章で、世の終わり、人の子の到来といったことについてイエスの言葉を詳しく伝えていて、ここではまだ、いわゆる終末論ですが、イエスの言葉を全面的に伝えようとしたのではなさそうです。

それなら、この箇所は何なのだろう？　むしろここは直前の箇所と関連しているように思われます。

先々週私どもが学んだ、十人の重い皮膚病を患っていた人のいやしです。とくにその十人のうちの一人、サマリア人であったこの一人が、イエスによっていやされたことを知って、神を賛美しながら戻ってきた。そしてイエスの「足もと」にひれ伏し感謝したとありました。

まさしくこれこそ《神の国》というべき出来事なのではないでしょうか。イエスがもたらしたものの、いやしによって示されたのは神の国なのです。

そのことを思い起こすため、イエス・キリストの言葉を、ルカによる福音書から二箇所引用します。

行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである(七・二二～二三)。

わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ(一一・二〇)。

イエスは《神の国》を言葉で教え、語っただけではありませんでした。それを現実にもたらしたのです。その意味で私ども、イエスご自身と切り離して神の国を考えることはできないのです。

神の国の《国》とは、ご存知のように、支配という意味です。神が《王》として権威をもって支配しているという意味です。神の国は、限定された神の領地、場所のことではありません。

この神の国の考え方は、じつは旧約聖書に根差すものです。旧約には神の国という言葉は出てきません。しかし新約の神の国、イエスの神の国が、旧約を背景にしてい

るのは明らかです。神はイエスラエルの〈王〉としてだけでなく、全世界の主、支配者として仰がれています。この信仰は、民族としての苦難の歴史の中で、失われることなく、かえって高められ、ダビデのような王（メシア）への、救い主への待望となり、世の終わりに実現する神の支配、神の国の希望として、民衆の中に生きつづけていたのです。

2 現在する神の国

それを考えれば、今日の箇所のはじめで、ファリサイ派の人々が、神の国という言葉葉を口にしながらイエスに尋ねたというのは、少し唐突な感じはありますが、ありえないことではありませんでした。

ファリサイ派の人びとが、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。じつに、神の国はあなたがたの間にあるのだ」（二〇～二一節）。

確かに、このファリサイ派の人々の質問、どのくらい真剣なのだろうと、思わないではありません。というのも、ここまで、ファリサイ派の人々は、律法学者もふくめて、あなたたちは神の国に入れない、というようなことを、イエスから言われつづけていたからです。

そこで邪推すれば、この質問は、真剣な質問というより、皮肉のようにも聞こえます。イエスよ、お前がいつているその〈神の国〉はいつ来るのか、そんなのは来ないのではないかと。

質問したファリサイ派の姿勢に、たとえそのような疑義があろうとも、イエスの答えからして明らかなのは、そして問題にされなければならぬのは、間違った質問の仕方をしているということです。

ファリサイ派は「いつ来るか」と尋ねています。これを読んですぐ思い出すのはイエスの昇天を前に使徒たちが尋ねた質問です。彼らはイエスに、イスラエルのために国を立て直してくださいさるの、この時ですか、と聞いたのに対して、イエスは、それは父なる神がお定めになっていること、時や時期は、あなたがたの知るところではないと答えています（使徒一・六～七）。

その通りではないでしょうか。いつ来るか、それを知って備えをしようというのであれば、別ですが……。今日詳しく取り上げることはできませんが、今日の箇所の後半で、旧約のノアのことを引いたり、ロトの妻のことを引いたりして語られているのは、突然やってくる神の国に対し、いつ到来してもよいように、世の終わりを見据えて、あなたたちは、つねに目を覚まし、祈り、こころ備えをして待っていないなければならないということです。

それだけではありません。「いつ来るのか」という問いには、イエスから見て、重大な間違いが隠れていました。

この「いつ来るか」という言葉、質問者は、明らかに、神の国を〈未来〉のことと考へ質問しています。

重要なことは、イエスは神の国を、未来のこととしてではなく、《現在》のこととして答えていることです。それが、イエスの答えの意味です。イエスは神の国を、いままにこの世に突入し、現にあるものとして理解しています。

「神の国はあなたがたの間にある」——この非常に印象深いイエスの言葉、「間にある」は、「あなたがたの中にある」（聖書協会共同訳）とも訳せます。ただ、そうであれば、「あなたがた」とは、質問したファリサイ派の人々の「中に」あるということでしょうか。それは考えにくいことで、この言葉は、神の国は未来のことではない、現在のことだといっているかと理解してよいと思います。ただし「中にある」というのを「心の中に」として、神の国をあまりに個人のこと、内面のこととしてはなりません。私の内も外も、いま神の支配のもとにあるのです。

さらにもう一つ、イエスの言葉から確認されなければならないのは、「見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない」という言葉の意味です。

現在するものとしての神の国は、しかし何か、外からの観測によって認定されうるというようなものではありません。特定の場所にも、特定の民族にも、結びつくものではないのです。

教会も神の国ではありません。むしろ教会において神の国は、神の恵みと選びによって生きて働いています。現実となっています。私ども、まさにこの私どもの教会において、聖霊に導かれイエスを主と告白し、そのように信じ、従い、神の民として神のご支配にあずかりつつ、終わりの日まで、主に仕え、主の証人として主を証しし歩んでいるのです。

3 待ちつつ急ぎつつ

神の国は未来のことではなく、現在のことだ、これが、簡単にいえば、ファリサイ派の問いに対するイエスの答えです。

とはいえ、神の国の未来性、つまりその完全な実現は未来にあるということが、なくなつたわけではありません。先ほど神の国の信仰は、旧約聖書を背景にもつと申し上げましたが、旧約では、神の国の実現は、まさに終わりの日のこととして待望されていたのです。

ルカは、申し上げたように、この後二二章で、世の終わりについて詳しく書いていますが、その諸段階を簡単に追うと、こうです。

第一段階は、世の終わりの徴です。戦争であり、天変地異であり、その中にはエルサレム神殿の崩壊というようなこともあります。第二段階は、人の子の到来です。イエス・キリストの再臨です。使徒信条で、「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん」と告白していることです。第三段階になって、世の終わりが来ます。イエス・キリストの支配のもとに、すべてのものが服させしめられます。そしてこの御子自身も父なる神に服し、神がすべてにおいてすべてとなられます（コリント一、一五・二四）。これが神の国です。

そうすると私どもは、この世にあって、神の国の恵みに現にあずかりつつ、しかしなお神の国への待望に生きているということになるのではないのでしょうか。ヨハネの手紙一に、こういう聖句があります。

私たちは今すでに神の子どもですが、私たちがどのようなかは、まだ現されていません(三・二 協会共同訳)。

〈すでに〉と〈まだ〉に注意してください。すでに私どもは神の国に生きることを許されています。すでに神の子です。神の国の到来を待たばいいのです。しかし私どもは神がすべてとなつた時をまだ生きているわけではありません。どのようなかはまだ現されていないのです。それゆえ全力を注いで、信仰と従順に生きなければなりません。急ぐのです。しかし、ただ急ぐのではありません。それはあせって自力に頼るだけのことになってしまいます。待ちつつ急ぐのです。急がずに待つだけなら怠惰なしもべでしかないことになるでしょう。

急ぎつつ待つ、待ちつつ急ぐ、これを教えてくれたのは、クリストフ・ブルームハルト(1842-1919)という一人の牧師です。今回、説教題を聖書の見出しから拝借しながら、ああそういえば、彼の四巻の説教集の四巻目の表題が「神の国は来る」だったと思い出したところです。

詳しいことは申し上げませんが、ブルームハルトという人は、父と子で、一九世紀から二〇世紀初頭にかけて、西南ドイツで活動した牧師です。いま名前をあげているのは子ブルームハルトです(1842-1919)。

父ブルームハルト(1805-1880)は一人の女性のいやしをしたことで有名になった人です。いやしというとか怪しげな感じがしますが、伝記を読むと、まさに御言葉の力による戦いだったことが記されています。「イエスは勝利者!」、これが、この家の合い言葉になっていました。

子ブルームハルトも牧師となり、父と同じ道を歩みます。しかし父の歩んだ道を離れ、牧師として社会主義者となり邦議会議員として活動したこともあります。しかし晩年、療養施設バート・ポルの牧会者としてごす中で、次第にその境地は変化し深い安息と待望の中を生き始めます。『神の国は来る』(一九〇七―一七年)はこの時代の説教、奨励集です。

最後に、今日は、およそ百年前、第一次大戦の少し前に語られた子ブルームハルトの言葉を聞いて終わりたいと思います。

「私たちは陰鬱な時代に生きています。それは死の時代である。地上的権力の時代であつて、天国の時代ではない。そして天国は喪失してしまったかのように見える。しかし、神の民よ、神の人よ、目を上げよ。この世界の闇の中にあつて、私たちは、心に光を持たねばならぬ。そしてその光とは、あらゆる禍の中にあつて私たちを助けることを知っておられる私たちの全能の神への希望である。私たちの今日における課題は、静かに心安らかに待つことである。私たちは、神様を待つ群れでなければならぬ。神の国が私たちに与えてくれる目標に向けて、確固不動であれ」(ルジューン編、子ブルームハルトの生涯と使信より)。

ここに描かれた百年前と、私どもの時代も、あまり変わらないと思わないわけにはいきません。それゆえこの時代を、私ども、神への希望を失わず、神の国を待つ群れとして、御言葉の宣べ伝えにつとめていきたいと思えます。

(二二年六月二二日)